

『理想の政治家 徳川綱吉』



このリレーエッセイの書き手はすべて現在ペットと暮らしているか、つい最近まで暮らしていた人だと思います。私はそうではありません。もちろん犬も猫も飼ったことがあります。楽しい思い出や愉快的な出来事もありましたが、今回はそれだけでなくある歴史上の人物のことを書きたいと思います。日本人ですが私に言わせればこれほど誤解されている人もいないと思います。

それは徳川 5 代将軍綱吉です。徳川綱吉と言えば反射的に思い浮かぶのが「生類哀れみの令」で、綱吉は人の命よりも犬の命を大事にしたトンデモ人間だと思ってる人がほとんどです。いくら「犬を大事にする」といっても、あれにはついていけないなと思ってる人が多いでしょう。

実はそれは間違いだと私は思っています。それどころか綱吉は世界に通用する

偉大な政治家であり人格者であると思っているのですが、なぜそう思うかここでご説明しましょう。

偉大な政治家との条件では何でしょうか。私は3つあると思います。1つは理想を持つこと。たとえば「世界を平和にしよう」ということですね。しかし、そのためには政治家ですから何らかの政策を立案して理想実現の方向にもっていかなければなりません。つまり理想を実現するための政策立案能力があること、これが2つ目です。そしていくら理想があっても政策立案能力があっても実行力がなければ何もなりません。実行しなければ政策は実現しませんから。つまりこの3つを兼ね備えた人間が世界中どこでも通じる通用する立派な政治家と言うことです。

私はもともと歴史については素人でした。つまり大学で歴史学を専攻した人間ではありませんが、にもかかわらず不遜な言い方になるかもしれませんが、私の方が日本の歴史をきちんと理解していると思っています。なぜなら私はその時代の人間の気持ちになって考えているからです。

そんなこと当たり前じゃないかと思いませんか？実はこれは大変難しい事なんです。たとえば戦国時代が終わったばかりの江戸時代初期、辻斬りが良いことだと褒められることであったのはご存じですか？ここで言う辻斬りとは江戸時代後期になって食い詰め浪人が裕福な商人を襲って金品を強奪する、あれとは違います。

あれは辻斬り強盗と言うべきで目的は金品強奪です。しかし江戸時代初期の辻斬りとは単に刀の切れ味を試すためのものでした。何の罪もない町人や農民を武士が刀の切れ味を試すために斬り殺す、それが良い事だったのです。

そんなバカなと思うかもしれないけれども、よく考えてください。戦国時代武士の使命は何でしたか？それは戦争で手柄を上げることですよね。手柄を上げるとは敵の有力な武将の首をとってこること、つまり殺すことです。しかし相手も歴戦の勇者、言葉を代えて言えば人殺しのプロです。そのプロを殺すためには日ごろから研鑽をつまなければいけません。研鑽とはつまり人殺しの練習です。

今、アイドル事務所に入ったけれども1人だけダンスが下手だという子がいたとします。その子が自分の弱点を克服するため、毎朝早くスタジオにやっけてきて必死に個人練習をしていれば、皆さん感心するでしょう。それと同じことです。

武士の仕事は「人殺し」なんだから常に人殺しの練習をしておくこと、あるいはその凶器に習熟しておく事が大切なんです。プロゴルファーでも1度も練習にせずにラウンドに出たりはしません。つまり「人殺し」に慣れておくこと、それは良いことだ。これが武士の常識だったんです。お分かりですか、これが当時の人の気持ちになるということです。

でも皆さんは今そうは思ってませんよね。人殺しは悪いことだし、特に辻斬り

なんていうのは何の罪も無い人を刀の切れ味を試すため殺すのだから、特に許されないと思ってますよね。それが常識、ではその常識はいつから始まったんでしょう。

江戸時代の初期の常識は戦国時代に引き続き、辻斬り大いにやりなさいだったんですよ。平和になって自然に常識が変わった？いえそんなことはありません。消防士や自衛官が常に最悪の事態に備えて訓練を重ねておくように、武士はいざというとき人の殺し方も知りませんでは話になりませんから。平和になった江戸時代初期でもなかなか武士の常識は変わらなかったのです。

ではどうやったら変わるとお思いますか？鎌倉時代以来約 500 年間、武士は人殺しが仕事だったんです、それをいきなりやめろと言うのは極めて難しい。やめたほうがいいよ、でもだめです。

もうお分かりですか、お前ら、これまでは人を殺したら褒められたが、これからは犬を殺しても死刑だぞとさえいえるのです。私はこういうことを「劇薬（政策）」と言っていますが、人間の習慣と言うのはそう簡単には変わりません。変えるにはとてつもない厳罰主義が必要なんです。綱吉がやったのはこれなんですね。

もちろん武家社会の常識とは 180 度違いますから、当時の人間で綱吉を褒めた人はほとんどいません。武家の棟梁のくせに何もわかっていないとか、とんでもな

いバカ將軍だとか、こっそりですが日記に書き残したりしています。だから歴史学者さんはそれを丸ごと信じ込み、綱吉はバカ殿だ、その証拠に当時の人たちもそう評価していた。という結論になるんです。

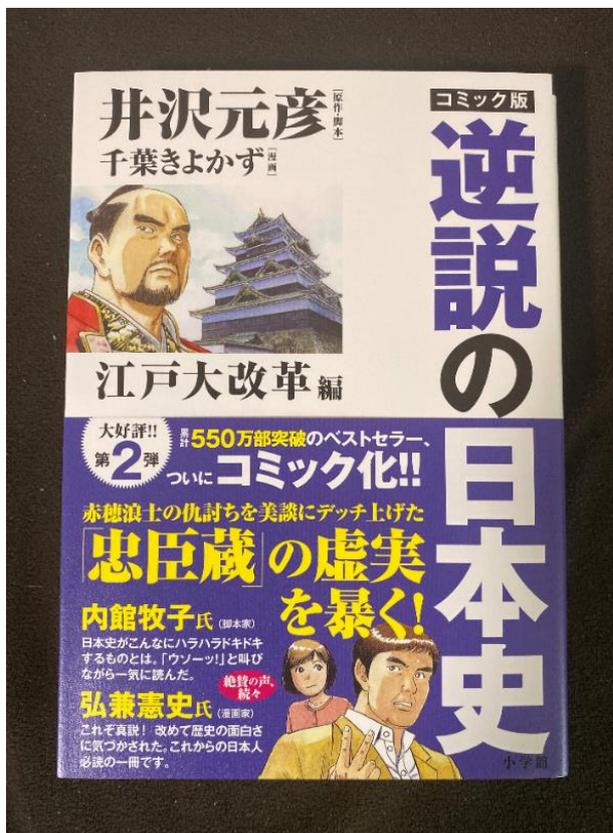
でもそれが真実ではない事はもうお分かりですよ、確かに現役世代は納得しません。しかしそういう人たちはどんどん年老いて死んでいきます。綱吉は断固とした実行力でこれを続けました。その結果新しい世代が育ちます。新しい世代の子供たちは、犬にも命がある尊重するのは当然だという新しい常識のもとに育ちます。そして昔は寿命が短いですから20年も経てば社会の主流層は交代します。つまり常識が変わります。

だからこそ、今あなたは犬の命を大切にしなければいけないと思っているんですよ。犬だけではありません。戦国時代、馬は「兵器」として大事にされましたが一度病気になると直ちに捨てられました。看病などして余裕はないからです。しかし綱吉はそれも禁止しました。その生命尊重はすべての生物に及んでいました。だからこそ「生類憐みの令」なのです。生類憐みすなわちすべての生物の生命尊重を日本人に自覚させたのは徳川綱吉なんです。理想を持ち政策を立案し実行した、その結果がこれです。だから私は綱吉を世界史クラスの偉人だと思ってるし、それがわからない日本の歴史学はどうしようもないと思ってます。

また世界で初めて野犬を保護し「殺処分ゼロ」を達成したのは徳川綱吉です。

残念ながら綱吉が死んだ後は費用がかかり過ぎるということでこの点は元に戻ってしまいましたが、生命尊重の気風は日本人の心に完全に定着しました。これは世界史レベルの素晴らしい功績です。

私はこの事実を皆さんにもっと知っていただきたい。ずっと前からそう書いているのですがなかなか日本人の常識にはなりません。最近その部分をコミック（写真 小学館刊）にしました。宣伝になってしまいますがこれは大変わかりやすく綱吉の業績が理解できるのでぜひ皆さんに読んでいただきたいと思います。



作家／大正大学表現学部客員教授

井沢 元彦